

交流集会「放射線診療における看護師と
診療放射線技師の協働
——各施設の取り組みと課題——」
Collaboration with nurse and radiological technologist
in radiation treatment

松川 京子 和田 清隆

Kyoko MATSUKAWA Kiyotaka WADA

メディポリス国際陽子線治療センター

Medipolis Proton Therapy and Research Center

放射線が発見された当初、その障害がまだ知られず、発見者のレントゲン自ら指に火傷を負って治療に悪戦苦闘したエピソードが知られています。エジソンがレントゲン線の応用を試み、弟子のデイリーが放射線障害で亡くなりました。このデイリーが世界最初の犠牲者だったそうです。放射線治療には、装置が発する量と患者が受ける量を知る必要があるにもかかわらず、X線では機器が発する線量評価が困難で、皮膚炎が出る量を基準にしたと云われています。このような歴史から現在における放射線診療は、X線の量や照射を扱う放射線腫瘍医（以下、医師）や医学物理士、診療放射線技師（以下、放射線技師）、そして、患者が受ける量を予測し必要なケアを提供する看護師によって放射線治療が成り立っています。さらに近年では、多職種が専門性を最大限に発揮し、協働・連携により全人的医療を提供することが求められています。このような背景の中、過去の学術集会では医師や医学物理士、放射線技師などからご講演いただきましたが、その次のステップとして今回の交流集会の企画に至りました。

看護師と放射線技師は毎日患者と顔を合わせ、治療やケアを提供するため、患者にとって身近な存在です。その関わりの中で、各職種が専門的な視点で捉えた患者情報を多職種間において共有していくことが重要です。連携とは、専門職種間のつながりやネットワークを意味し、協働はある目的に対し計画から一緒に取り組み、議論を交わすことで高め合う動きであると考えます。私達はこの協働が一つでも多くあることが連携の体制を高め、患者が信頼するスタッフ、安心できるチーム医療につながると感じています。今回の交流集会はこのような経緯から、まずは患者により近い看護師と放射線技師に焦点を当て意見交換ができる機会として、3施設の協働事例をご紹介します。

長崎医療センターからは、スタッフの役割を明確にし、情報共有のためのシートを用い、ブリーフィングを行いながらコミュニケーションを図ることで、チームを意識した取り組みにつながった事例、また佐世保市総合医療センターからは、看護師が傍にいて、コミュニケーションの向上につながり、お互いの専門的なアセスメントを共有できた事例を紹介してもらいました。当施設からは、リスク患者・放射線性皮膚炎に対す

る取り組みとして、施設独自の基準やツールを作成した結果、患者のサポートだけでなく、看護師、放射線技師らの意識向上や業務改善につながった経験、またPDCAサイクルの必要性についてご紹介しました。安全・安心な放射線診療を提供するには、連携を高める必要があります、その方法として協働すること、その際に必要な情報共有の手段を考えることは、どの施設においても共通していました。

今回は看護師と放射線技師に焦点を当てましたが、放射線診療は医師や医学物理士、その他の職種も含めたチーム医療から成り立ち、今回の機会がそのチーム医療全体の協働につながるきっかけになれば幸いです。意見交換をするにはまだまだ時間が足りませんでしたが、ご参加いただいた皆様の気付きや思いが、また来年の学術集会につながることを期待し、今回のテーマからさらにチーム医療についてどのような取り組みができるか考えていきたいと思います。